曲淵城主と時頼

三瀬峠へ向かう、国道の曲淵トンネルを通過すると貯水池が見えてきます。
その貯水池南側の国道と旧道とが別れるところに、鳥居があります。
その鳥居の先には百数十段の石段があり、そこを上りきったところにある
小さな神社の境内一帯が山城の跡です。
この山城は、1570 年から 1592 年の間、
曲淵河内守（こうちのかみ）とその子信助（のぶすけ）の城でした。
このお話はその曲淵河内守のお話です。
曲渕にある一軒家に、鍛冶屋の甚五兵衛（じんごべえ）さんがおかみさんと暮らしていました。
ある寒い夜、なにやら音が聞こえます。
「頼もう、頼もう。」
甚五兵衛さんが戸を開けると、見知らぬお坊さんが立っています。
「今晩、泊めてくださいませんか。」
お坊さんのみすぼらしい格好を見て、おかみさんは小さい声で
「泊めんほうがよかよ。」
けれども心やさしく、情け深い甚五兵衛さんは
「こげん寒さの厳しかとに、野宿ばさせるわけにはいくまいもん。
お坊さん、隙間だらけの家ですばってん、どうぞ、どうぞ。」
囲炉裏のそばに座らせ、あるだけの薪を囲炉裏にくべ、
「ささ、どうぞ火にあたって、熱かお茶ば飲んで温まってください。」
お坊さんは、甚五兵衛さんの心のこもったもてなしに感謝し、
「こんなに嬉しいことはありません。あぁ、ありがたい、ありがたい。」
とても喜びました。
翌朝、お坊さんが甚五兵衛さんに手紙を渡してこう言いました。
「お礼をしたいのですが、なんにもありません。
この手紙を糸島の高祖（たかす）の城に持って行き、殿様に見せてください。」
「こ、こればですか。殿様は会ってくださるじゃろうか。」
「そうですね、これを見せればわかるはずですから。」
甚五兵衛さんに厚くお礼を言い、名前も言わず立ち去りました。
甚五兵衛さんは手紙を高祖の殿様に見せに行きました。
「おぉ、これは。」
殿様は手紙を見るなりとても驚き、手紙をじっくり見ています。
「手厚いもてなしをしてくれたのじゃな。」
「寒い晩だったので、薪をたいたり、熱かお茶ば飲んでもろうたりしたとですが、何か？」
甚五兵衛さんは、何かあったのかと思い心配顔です。

手紙を読んだ殿様は急に甚五兵衛さんに近づき、両手を固くにぎりしめました。
「心づくしのもてなしをありがとう。大変感謝されていて、よくよく礼を言ってくれと書いてある。」
「は、はぁ。で、あの方はどなたなのでしょうか？」
「第五代執権 北条時頼（ほうじょうときより）様、今は出家して、最明寺入道（さいみょうじにゅうどう）時頼様じゃ。」
「えー、あんな、みすぼらしい姿をなさっていたが、そんなに偉い方だったとは。」
「そなたの分け隔てのないもてなしに、心を打たれたとのこと。私からも厚く礼を言うぞ。」
手紙の主、甚五兵衛さんの家に泊まったお坊さんは、西明寺入道時頼でした。
つまり、時の将軍、北条時宗（ほうじょうときむね）の父、第五代執権 北条時頼だったのです。
甚五兵衛さんの行いに心を打たれた高祖の殿様は、それからすぐ甚五兵衛さんに「曲淵河内守」という名前を与え、
早良区一帯を治める城主にしたそうです。
この「曲淵城主と時頼」は、現在の早良区曲淵が舞台のお話です。